

Title	遅れて来た啓蒙児童誌：エンゲルハルトとメルケルの『新児童の友』
Sub Title	Einige Bemerkungen zur aufklärerischen Kinderzeitschrift Neuer Kinderfreund Engelhardts und Merkels
Author	佐藤, 茂樹(Sato, Shigeki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2001
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.81, (2001. 12) ,p.143(270)- 159(254)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	宮下啓三教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00810001-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

遅れて来た啓蒙児童誌

——エンゲルハルトとメルケルの『新児童の友』——

佐藤 茂樹

序

『新児童の友』⁽¹⁾という児童誌がある。エンゲルハルトとメルケルという二人が編纂した。1794年に刊行が始まって、1798年に完結した。初版の出版地は、ドイツ啓蒙の中心地にして書籍出版のモノポール、ライプツィヒである。刊行は不定期で、1巻から4巻までが1794年、5巻から7巻までが1795年、8巻と9巻が1796年、10巻と11巻が1797年、そして最終の12巻が1798年。その後すぐ改訂第二版が出ている。この種の出版物は、完結すると、改めて「本」の形で出版されるのが常であった。手元にあるのは、1799年にウィーンとプラハのフランツ・ハース書店が出した版で、12巻が2巻ずつ合本されている。当時、ライプツィヒを中心に、版元の利益を守るために、翻刻出版を締め出す動きが進んでいた。オーストリアはそれに対して財政と文化政策の両面から翻刻を容認していたので⁽²⁾、この版はその経緯の出版である公算が大である。銅版の扉絵等がオリジナルと異なっているのは、まだ複製技術が及ばなかったためだろう。ちなみに、ブリュッゲマン／エーヴァースの事典では、この版に関しては4巻までの記載しかない⁽³⁾。

「新」と付されているのは、もちろん先例があって、それに倣ったからに他ならない。同じくライプツィヒを出版地として、1775年に刊行が始まったクリスティアン・フェリクス・ヴァイセの『児童の友』⁽⁴⁾がそれである。啓蒙のニュー・メディア「道德週刊誌」の衣鉢を継ぎ、当初は週刊、

後には季刊の形で刊行され、最終的には24部362篇を数えた。これにもアーデルングの『ライブツィヒ児童週刊誌』⁽⁵⁾という先例がある。その完結後に続編を求める出版者の要請がありそれに応えた⁽⁶⁾、と第1篇の書き出しには述べられている。では、当時どれほどの評判を呼んだものだろう。ヴァイセの自伝は、オーストリアだけでも翻刻出版の部数が一万五千を数えた⁽⁷⁾、と伝えている。また、19世紀に入って自らも『新児童の友』を編んだエンゲルマンに次のような一節がある。

「親愛なる読者のみなさんの中には、きっとヴァイセの『児童の友』を読んだことのある人もいでしょう。自分自身では読まなくとも、ご両親は読んだことがあるかも知れません。20年から30年前には、ドイツではこの本ほど人気があって、よく売れて、読まれた本はなかったからです。ヨーロッパの他の国々でも知られ、評判を呼んでいました。子ども時代のわたしにも、彼の『児童の友』と『児童の歌謡集』は為になって楽しい幾時間かを与えてくれたもので、ここから感謝しています。』⁽⁸⁾

『児童の友』は1782年まで刊行され続けた。この息の長さは、他に類を見ない。こうしてこの出版物は、啓蒙の時代の児童書の代名詞となり、ヴァイセは〈児童の友にして父〉と称揚された。そして、ここに見るような後継者を生んだ。

ところで、児童書の出版件数はこの世紀の80年代に最初の頂点を迎えたと言われるが⁽⁹⁾、独創性と重要性に富む書物の出現は、この『児童の友』の刊行開始時とほぼ期を一にしている。子どもの遊戯衝動を基に「遊びと知育・徳育」の結合を試みたヨーハン・ゴットリーブ・シュンメルの子どもの遊びと会話⁽¹⁰⁾の第1巻は1776年、民衆啓蒙の最初の試みであるフリードリヒ・エーヴァーハルト・フォン・ロホの学校読本『児童の友』⁽¹¹⁾が同じく1776年、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』を換骨奪胎したヨアヒム・ハインリヒ・カンベのベスト・セラー『ロビンソン・ジュニ

アJ⁽¹²⁾の第1部が1779年である。これらの書は、根底においてひとつの雛型を作り上げた。ロホは、従来の読本に慣例の教理問答等に代えて生活実践的なテキストを採用して、読み書きの能力の育成と生活世界の啓蒙の統一を図った。シュンメルやカンペは、テキストを二重構造にして、批判的読書を可能にするパースペクティブを導入した。すでに他の機会に論じたので⁽¹³⁾、繰り返さないが、こうした試みによって、ここに挙げた出版物はドイツ児童書の歴史に画期的な寄与をなした。大雑把な言い方をすれば、1776年前後をもってこのパラダイム中のアイディアは大方出揃ったのである。エンゲルハルトとメルケルの『新児童の友』の出版は、それから約20年を経た時期となる。

1. 〈家族の会話〉＝市民的イデオロギーの継承

この『新児童の友』も、ヴァイセの『児童の友』同様、全体の枠筋を作る家族の紹介から始まる。ヴァイセの児童誌は一定の間隔を置いて刊行される上に、なぞなぞから児童劇に到るまでヴァラエティに富んだテキストを提供するものである。そこで、次篇への関心を持続させ、ひとつひとつのエピソードに連続性を与える〈家族の会話〉の場面を設定して、全体の枠とした。『自伝』の一節を引用しよう。

「両親、子どもたち、それに家族の友人たちはみな、考え方、性向、素質、習慣、仕事の好みといった点できちんと描き分けられていた。子どもに物事を教える題材はすべて、メンバーの誰もが自分なりの仕方に加わる家族の会話の形に編纂された。編者は、読者にこの家族に対する好感を持たせることに成功し、それ以上に好ましかったことには、これが編者自身の家族であり、その生活や行動、教育や学習、仕事や楽しめ事が描き出されているという錯覚を生み出すことに成功したのである。」⁽¹⁴⁾

『児童の友』が一世を風靡して、完結後も類似の児童誌を生み続けたの

は、この構成上の成功によるところが大きい。

梓筋の中心には、「父」がいた。子どもたちは父親の下に集い、父親に知識や行動の指針を求め、父親から思考の不備や行動の誤りを正されるのである。「父」が生身の存在から内在化した規範すなわち超自我と化したとき、子どもは社会化を向けて大きな前進を果たすことになる。「父に倣いて」こそが、いわば市民的児童教育の合い言葉であった。エンゲルハルトとメルケルがヴァイセ流の梓筋の構成を継承したことは、この父を中心に置いた思考法をも継承したことを意味している。

では、各登場人物を見ておこう。ここで紹介される家族は、父の役割を演じる編者を含めて次の7人である。父は、市民社会が可能にした新しい父親像を示している。編者の自己紹介に従えば、職務と子どもの教育のバランスを考え、そのための自由な時間のゆとりを持てる父親である⁽¹⁵⁾。一方、子どもたちは、以下の示すように、一様に克服すべき欠点を併せ持っている。折に触れてのその自覚と克服の過程が読者の前に示されなければならないからだ。未完成ではあるが、完成への能力を備えた存在としての子ども観が背景にある。男女差をも含めて、完成像の一端はこの短い人物紹介からも見て取れよう。男児には、将来の社会の一員として分け持つ役割への資質が書き込まれている。

*グスタフ（長男、14歳）：6，7歳のころからおもちゃの類に興味を示さず、読書に専心。歴史、地理、文芸、言語、博物が好き。唯一、ひとり部屋を与えられている。将来は、大学での勉学を希望。知ったかぶりが欠点。

*アグネーゼ（長女、12歳）：だらしなく、なげやりで、けんか腰で、生意気な女の子の見本。「きちんとした女の子」という劇での失敗をきっかけに自省し、改まる。その後は、母親の家事も手伝うようになる。ピアノが上手で、きれいな声の持ち主。

*エリーゼ（次女、11歳）：粗野で、激しやすくて、でしゃばりで、ときに服装がだらしなく、知りたがりの度が過ぎるが、家庭的で、心根

の良さが一番。市場の現状に通じており、学校より台所を持ち場と考える。わずかな持物を貧しい者に喜捨。

*エドゥアルト（次男、9歳）：物静かで、友愛的。学校が好きで、放課後は工作に熱中する。覗きからくりなどの想を凝らしたものを作ることができる。この方面に職業的素質。コミュニケーションの意志に欠けることや生活の安逸さを求めすぎることが欠点。

*フランツ（三男、8歳）：快活で、敏捷な身体を持ち、じっとしている遊びが嫌いで、家中をかき回す。授業の後にはひたすら兵隊ごっこに熱中し、実態を知らずに兵士に憧れているところがある。実際の勇士になるには、快不快に行動を左右されすぎたり、怖がりであったりと、数々の欠陥がある。

*ハインリヒ（四男、7歳）：まだ特記すべき状態まで成長していない。算術が好きで、遊びの中にも商人の素質の片鱗を見せる。旅行記を愛読。

子どもはすべて実子で6人であり、ヴァイセの4人より2人多い。ゲーテと親交のあったシュタイン夫人が7人の子の母であったことはよく知られるが、18世紀末のルツェルンの統計を例にとると⁽¹⁶⁾、正式な婚姻関係にある女性が出産した子どもの数の平均は、上層階級の場合で3.9人だという。しかも5歳まで生き延びる確率はまだ7割を超えなかったことを顧慮すると、この子どもの数は現実を反映したものというより、構成上の工夫と見なすべきであろう。対象とする受容者の年齢の各層に配慮して、できるだけ余すことなく登場人物を配した結果ということだろうか。

この家族の紹介には、一見して明らかな特徴がある。母親への言及がないことだ。さらには、祖父母が欠けていることだ。これもヴァイセの場合と同じである。市民社会の家族構成は、両親と子どもの核家族化に向かった。社会史的概念では、これを〈小家族〉という。概ね、次のように言われるのが常である。18世紀には、職住の分離によって〈家庭〉が初めて私的空間として成立した。その中で、外の職場に出勤して収入をもたらす父

と私的空間としての家庭を快適にアレンジする母という家庭内の分業が成立した。さらに子どもは就労から解放されて、幼年期という固有の時期をふさわしい教育を受けながら過ごすことになった⁽¹⁷⁾。現実にはどれほどの家庭がそのような形態をとっていたかは不明であるが、両親と子どもだけから成る家族を描くことによって、ヴァイセは新しい時代の児童に向けた自著の舞台に、少なくともモデルとして、この新しい家族のあり方を据えたわけである。母親への言及が欠けているのは、「母」の役割への眼差しが欠けていたからに他ならない。エンゲルハルトとメルケルは、これをもそっくり継承している。

この家族に、訪問したり、旅行に連れ出したりする友人4人が加わる。

- * ヴァルター：子供たちの教師。語り手の大学時代の友人。2歳のときに両親が死に、親戚の手で育てられる。将来を嘱望され、援助によって学業を終えるが、健康に恵まれないために牧師の職に就けないでいた。再会した父に子どもたちの家庭教師に請われる。
- * 顧問官シュタイナウ：語り手の幼少からの友人。資産家。若いときから何の憂いもなく諸国を旅行して見聞を広め、知識や経験が豊富。
- * 退役大佐ヴァレンシュタイン：7年戦争や対仏戦争に従軍。負傷の後、退役。下層の出身ながら、軍事に通じることによって地位を得る。夏は田舎、冬は街に暮らす。
- * ヴェルナー：商人。冒険的航海で財を成す物語を考えなく真似て、様々な苦難を体験する。クックの船にも船乗りとして乗船。若年の愚行を克服して帰国する設定は、当時評判のカンペの『ロビンソン・ジュニア』を取り入れたのかも知れない。

この友人たちは、訪問の都度この家族に新しい知識や視野と経験の拡大をもたらす。年齢は明記されていないが、このうち退役大佐は、祖父の世代とそれにふさわしい経験を補う。ただし、この世代からの継承は直接的ではなく、批判のフィルターが働いている。父の世代に属す友人がふたり

いるのは、単に学友同士年齢が近いという理由だけではなかろう。父の世代こそが、現役なのだ。ひとりは、窮乏や病弱に屈服せず子どもたちの範になりうる人格を形成してきた「第二の父」。もうひとりは、恵まれた条件の下で一切の生活上の労苦に煩わされず、自己形成のできた人物である。対照的な両方のタイプに接することの必要が描かれている。最後のひとりは、若年の愚行を苦い教訓として伝授するとともに、新時代の経験世界の拡大を体現している。

友人たちの数はヴァイセと同数である。ヴァイセでは4人が〈態を表す名前〉によってより類型的に描き分けられていた点を除けば、役割に抜本的な変更は認められない。

『新児童の友』の構成を「枠」という形式に焦点を当てながら紹介した⁽¹⁸⁾。エンゲルハルトとメルケルは、ヴァイセの『児童の友』が作り出した枠をほぼそのまま継承している。そこで、この枠の働きとそれを継承したことの意味を総括しておこう。第一に、枠は、構成上の便宜であると同時に、読者の思考に対する枠でもある。枠の会話の中で取り上げられるその都度のエピソードは、枠に登場する人物たちの論評の材料にされ、彼らの視点からの断を下される。読者は、父に主導される家族の会話に従いながら、結論に到る議論の過程を共に学習するのである。第二に、この枠は、構成そのものの中に他ならぬ当時の社会構成のイデオロギーを反映している。小家族制、その中での役割分担、そして何よりも父と（男）子を軸とした階級財産すなわち〈教養〉の世代継承…等々。この枠を継承したことは、一方では「公認済みの良書」として、同時代の読書界に歓迎される大きな要因であった。その一方で、個々のエピソードにどのような新知見を盛り込もうと、約20年を経てなおこの枠に無批判であったことの負の側面は否めない。

2. 〈迷信〉と階級的自意識

この児童誌のモットーは「教化 Belehrung と娯楽 Unterhaltung」⁽¹⁹⁾である。同時代の作用美学に対応したこの構想に従って、市民社会の後継者

としての自己形成を助ける様々な材料が提供される。その中で、啓蒙の当初から引き継がれてきたのが、〈迷信からの解放〉という題材だ。

まず、ふたつの証言を引用する。

「ところで父は、悪魔の所業ともいうべき、神の秩序を乱すような無数の迷信——たとえば魔女の術や幽霊や夜の妖怪、前兆や予感などのたわいのない空想には、全くとらわれない人であった。父は細心の注意を払って、私たちがこのような習俗に染まらないよう気を配ったが、それはまず無理というものだった。それで父は、こうした悪に対抗する手段として、この種のまやかしを暴くような数々の話を私たちに聞かせた。さらに父は、私たちを明かり一つ持たせずに使いに出し、村の向こうはずれで何がしかの用を足させたりしたものだった。私が10歳の時には、連れも手提灯もなくとも少しもこわがらずに、伝言をことづかっては、歩いて30分はかかるクライン・ヘッパハ支会堂や隣の教区の牧師館に向かって飛び出していったものだ。』⁽²⁰⁾

この証言者は、1723年に生れた。父親は牧師で、「子どもたち全員が、父自らの手でしつけと教育を受けるという幸運を得た。』⁽²¹⁾この点は、重要である。

では、次の証言はどうだろう。

「私たちは、わくわくするような話を聞いたがったものだが、冬になると、すばらしい刺激が得られた。冬の夜には、近所の人たちが糸巻き棒を手にしてうちへ集まり、幽霊や魔女、魔法使い、ポルターガイストや白い女、滅びた城や宝捜しのこと、あるいはマンドラゴラ（迷信的な霊薬）、物を消したり、固めてしまったりするまじないなどについて、飽くことなく語り合ったからである。私は興味津々で炉のうしろの私だけの場所に腰を落ちつけ、寢床へ行く気など毛頭なかった。子どもの私にとってつまらない話の時は、椅子の上で眠り込んでしまうこともたび

たびあったのだが…。それに、幽霊の話などに怖じ気づいて、一人で部屋を出ていく勇気がなくなってしまうこともあった。』⁽²²⁾

こちらの証言者は、先の証言者よりも35年後の1758年の生まれである。父親は煉瓦職人で、生活費を賄うためにさらに楽師の副業もしなければならなかったという。「日曜日や祝日には朝の三時か四時、時には五時頃まで若者たちのダンスの伴奏を務めた後、父は休む間もなく、きつい煉瓦造りの仕事に就くために、ヴェルデンを指して、徒歩で出立しなければならなかった。』⁽²³⁾この記述からは、こちらの父親は一貫して子どもの教育に割く時間的ゆとりはとてまなかったことが読み取れる。

このふたつの証言を読み比べたら、ヴァイセであれエンゲルハルトとメルケルのふたりであれ、即座にこう判断したに違いない。子どもの教育に対する父の関与の有無が単純な年月の経過よりもはるかに啓蒙の浸透に貢献している証左だ、と。そして、自分たちの著作は、まさに第一の証言にあるような父親の役割を代行するものだという考えを強くしたに違いない。

啓蒙の時代の児童書は、幽霊の類に対する〈臆病〉には今日の目から見て意外なほどに不寛容だ。それは性格の弱さに起因するのではなく、理性の欠如の証しなのである。ヴァイセは、読み書きの初歩を手ほどきする『新ABC読本』（1773）の中で、「怖がりの少年」と題してこの悪徳を取り上げている。「愚かな女中」の語る黒い男の話によって迷信の種を植え付けられた少年が、初めて目にする煙突掃除夫をその類の存在と思い込んで恐怖に慄くが、その愚を父親によって実証的に正されるという話である。「少年は恥ずかしく思い、その後は二度と再び迷信を信じる使用人たちの話には耳を貸しませんでした」⁽²⁴⁾と結ばれる。年少者を対象とした1ページ足らずのテキストだけに、構図は明白である。「愚かな女中」に代表される迷信的な「使用人たち」の世界が「父親」に代表される合理的な判断の世界にはっきりと対比され、断罪されているのである。

それでは、エンゲルハルトとメルケルはこの題材にどう取り組んでいる

か。第1巻冒頭の子どもたちを紹介する個所で、父は早々と〈臆病〉を話題にして、こう語っている。

「子どもたちを真っ暗なときに家の一番離れた隅に遣わしても、みなわずかばかりも怖がらない。だが、フランツには地下室や薪小屋や階段下や屋根裏は恐ろしい場所で、どんなにわたしが怖くないと教えても、いつも震えながらでなければひとりでは行けないところなのだ。わたしは、けっして子どもたちの世話をおろかで頭にメルヘンのいっぱい詰まった子守り女たちにまかせたことはなかった。それなのにフランツときたら、まるでたった今、乳母の部屋で作られたばかりの主人公だ。」⁽²⁵⁾

ここでも、「頭にメルヘンのいっぱい詰まった子守り女たち」が非合理的な恐怖心を植え付ける源として語られている。そして、この父親の〈乳母の部屋〉への呪詛は、次に第3巻の「幽霊」⁽²⁶⁾と題された児童劇中で登場人物の口を借りて改めて正面から取り上げられることになる。

まず筋を見ておこう。さる老男爵のもとに、甥に当たる子どもたちが滞在している。傍若無人な彼らは男爵の意には添わないようだ。もう一組、男爵の友人の子どもたちも訪れている。好意の行先は遺産の行先をも左右する。自分たちに対する男爵の不興を逸らし、もう一方の子どもたちに好意が向かわないように、彼らは悪さを仕掛ける。先祖伝来の武具を格納している部屋に幽霊が出るというのだ。計略はうまく行きそうに見えるが、そこに強敵が現れる。ちょうど来合わせた懇意の商人の一家が幽霊の正体を明かして見せるという。

この劇に特徴的なことは、悪さを仕掛ける子どもたちもそれを見破る子どもたちもともに迷信から解放されていることだ。大人が子どもの蒙を啓くという単純な図式は、ここでは見られない。むしろ、まだ迷信の中に住まっている者たちに対する優越の意識が「幽霊」を装う悪さの発端にある。例えば、見破られはしないかという仲間の心配に対する次の台詞はどうだろう。

ヴォルフ：…台所女にしたって、それどころか村のものたちだって、城に近づくことさえしないだろうさ。いわんや、俺たちに胴や足があるか試してみるなんて誰がするもんか。——そんな心配は、わずかなりもないね。——あまりにも迷信深い連中だからね。（第一幕第十二場）

この高を括った言い方は、単に悪ぶった様子を表すためものではなからう。読者が感情移入するのでない側の台詞にも、迷信を突き放した距離が込められているのである。

幽霊の正体が明かされる第三幕を、編者たちは、悪さの下準備をしている無言の情景で始めている。その様子は、むしろ科学的な実験のおもしろさを教えているかのようだ。「怪」の現出は、化学薬品の類でなされる。容器に可燃性のブランディを注ぎ、その中に塩を撒き入れて怪しい炎を燃え立たせたり、剣に薬品を塗って怪しく光らせたり…使用する薬品の類も通称ではなく、スピリトゥス・ヴィニ、フォスフォルス、コロフォニウム…とラテン語の名称が用いられている。読者が自分でも実際に演じてみようとしたら、そうした道具や薬品や効果に親しむことになる。そして、知らなければ恐怖の対象となる現象も、自分たちの手の内にあることを知るというわけである。

合理的精神による迷信からの解放は、階級的な自意識と対になっている。男爵も、その父も幼い頃に聞かされた乳母のメルヘンの世界を容易に抜けきらなかった。男爵の遺産相続者に予定された貴族の子どもたちは、まんまと計略にかかって、その資格を失ってしまった。編者たちは、啓蒙化された市民の勝利を語って幕を閉じている。男爵が市民の子に対して遺産の譲渡を申し出ることは、次代の担い手としての認知を暗示してはいないか。

男爵：（ルードルフの子どもたちを抱きしめながら）愛しい子たち

よ！ お前たちは、わしをお前たちの勇気によって恥じ入らせ、悪しき教育によって慣れ親しんでいた愚かさから引き戻してくれた。お前たちだけがわしの遺産を受け継ぐのにふさわしい。(第三幕第三場)

これに対する返答は、控え目ながら決然とした申し出の拒絶である。男爵の階級に引き上げてもらうという形での認知は必要ないからである。

ルードルフ：わたしが子どもたちに与えた教育の最大の報酬は、彼らがそのために誰からも評価され、愛されるのを目にする喜びです。もしわしの子どもたちのために甥ごさんたちの相続権を剥奪しようとなさるなら、その喜びをわたしから奪ってしまうことになるでしょう。(同上)

この『幽霊』という児童劇の内容を、ここでもう一度振り返っておこう。年端のいかない子どもたちが（しかも、胆力の問題ではないことを強調するかのように、三人のうちふたりまでが女の子だ）気負いもなく「幽霊」に立ち向かい、その正体を明かす。この子どもたちは、啓蒙化された市民である父親の教育によって、当初から合理的な物の見方を身につけている。だから、怖じることなく現象を直視し、安んじて対決することができる。その前では、自分たちだけが「迷信に囚われた旧世代の人間たち」を手玉に取れると思いがっている貴族の子どもたちの企みも易々と失敗に帰してしまう。このように振り返ると、この劇の背景にはやはり父による教育の讃歌があることがわかる。そして、依然として「乳母のメルヘン」を迷信の担い手として断罪する言説の中にとどまり、それを補強しようとしている。

3. 今なお『児童の友』の銀河系の中に？

ヴァイセの『児童の友』は、書物と出版の大きな転換期を体現していた。読書の形態は一書精読から多読に変わり、書物は随時刊行されて、常

に新しい情報を提供するものへと変っていくが、週刊連載という提供方法はその先端を行くものであった。これは、一面で知識・情報の切売りの始まりをも意味していた。それと並行して、書物を所有することは、特定の立場・身分に応じた特権的なものでも、所有者を神秘化するものでもなくなり、購入に足る金銭を所有するものなら誰の手にも巡り来るものになった。できるだけ安く造本しようという考えはロホの学校読本でも表明されていたし、ヴァイセも普及のための廉価版を出版している。美しく豪華に製本されて調度の一部として部屋を飾っても、それを所有することは、そこにだけ秘められた聖なる呪力に与ることではなく、地図や定規や計算尺のような合理的の道具を所有することに近いものとなった。こうして書物の脱呪術化が完成する。啓蒙の目指した世界の脱呪術化には、メディアの脱呪術化が並行していたのである。ヴァイセの『児童の友』は、児童という新しい受容者の開拓も含めて、こうしたパラダイムの形成そのものに与ったことによって、今後とも不動の価値を保ち続けるはずである。では、翻ってエンゲルハルトとメルケルの場合はどうだろう。検討の補助軸を、ここでは、『新児童の友』に先行するある書物に求めてみよう。

1787年、すなわち『新児童の友』に先立つこと14年、エアフルトで匿名の著者によるメルヘン集が出版された。そのタイトルは、『口伝えの物語から編んだ子どものメルヘン集』⁽²⁷⁾という。「口伝え」と「子ども」と「メルヘン」を組み合わせたタイトル自体の中に、既成の言説に反した大胆な試みが覗かれる。著者は、クリストフ・ヴィルヘルム・ギュンターといい、ワイマールの助任司祭で、ヘルダーの知人でもあった。

このメルヘン集には、構想と背景の現実すでに新しいパラダイム形成の胎動が感じられる。そのひとつは、「母」の登場である。著者は、「子どものメルヘンが不足しているという良き母親たちの嘆きに促されて」⁽²⁸⁾この書を編んだと述べている。さりげない書き方ではあるが、「父」一辺倒であった児童書の言説の中で、母親が子どもたちの読物を取捨選択しているという現実、そしてそれなりの基準をもって自分たちの求めるものの不足を嘆いているという現実、ついで語られたことはなかったはずであ

る。

ふたつ目は、メルヘンへの新しい理解である。著者は、メルヘンを「高次の存在の見えざる手によって織り成され、導かれる不可思議な出来事の物語」⁽²⁹⁾と定義し、他ならぬ「真実への愛」⁽³⁰⁾から好んで読まれるもの、と述べている。もはや無知に由来する荒唐無稽な物語と捉えてはいない。それどころか、究めがたい出来事を合理的な理解の仕方とは異なった仕方で把握する試みと捉え、だからこそ原因と結果の因果関係に囚われることの少ない子どもにこそふさわしい、という結論をそこから導き出している。理性の法廷で一方的な批判に晒されるばかりだった「乳母の部屋」はここに初めて弁護者を見出したのである。

この著者の特異な位置づけは、最終的には、その歴史意識に現れている。この書の序文は友人との会話の形を取っているが、そこで著者は予想される批判を友人に先取りさせて、「どうすればわれわれの啓蒙化された時代が再び暗黒の見霊者の昔に戻ることが可能なのでしょうか。それは、人間精神についてのわたしの高い評価にとっても合うものではありません」⁽³¹⁾と語らせている。それに対して著者は、「人類全体が知識と啓蒙の点で絶えず上向きに進むに違いないと信じるに足る理由はどこにあるのですか」⁽³²⁾と応じ、啓蒙の未来に対する楽観からの訣別を宣言している。そして、「子どもは壮年になり、壮年は老人になり、老人は子どもになります。この循環を個々の民族もまた一巡するのです」⁽³³⁾という独特の歴史観を披露するのである。こうした考えは、一個人の奇抜な着想にとどまらず、ロマン派の土壌を準備するもののひとつに数えることができる。ひとつの時代の現実と、そこから生じたそこへ言葉を与えた思潮との対応を顧慮すれば、先に述べた新しいパラダイム形成の胎動をここに見ることは、けっして不当ではなからう。

『新児童の友』は、ヴァイセの『児童の友』刊行開始から見て19年後、完結した時点から見て12年後の出版である。これだけの隔たりがあるにもかかわらず、すでに述べたように、すぐに版を重ねた。ここには、児童の教育をめぐる市民的言説の根強さを見ることができる反面、その14年前に

新たなパラダイム形成の胎動を感じさせるギュンターの試みが公開されている事実を考え合わせると、エンゲルハルトとメルケルの労作には、どうしても「公認済みの良書」という立場に安住した「古さ」の印象が否めないものである。

注

- (1) Engelhardt, Karl August und Merkel, Dankgott Immanuel (Hrsg.): Neuer Kinderfreund. Leipzig 17748-1798. 本稿が参照したのは、Wien und Prag 1799の版である。以下の引用は、すべてこの版による。
- (2) Schmidt, Peter: Buchmarkt, Verlagswesen und Zeitschriften. In: Wuthenow, Ralph-Rainer: Deutsche Literatur. Eine Sozialgeschichte, Bd.4 Zwischen Absolutismus und Aufklärung: Rationalismus, Empfindsamkeit, Sturm und Drang. Hamburg 1986, S. 22.
- (3) Brüggemann, Theodor (Zusammenarbeit mit Hans-Heino Ewers): Handbuch zur Kinder und Jugendliteratur. Von 1750 bis 1800. Stuttgart 1982, Sp. 1462f.
- (4) Weiße, Christian Felix: Der Kinderfreund. Ein Wochenblatt. 24 Teile. Leipzig 1776-1782. なお、本稿が参照したのは、Sammlung philosophischer Schriften. 1. Teil. Tübingen 1778として出版された版である。以下の引用は、すべてこの版による。
- (5) Adelung, Johann Christoph: Leipziger Wochenblatt für Kinder. Leipzig 1772-1774.
- (6) Der Kinderfreund, 1. Teil, I. bis V. Stück, S. 3.
- (7) Engelsing, Rolf: Analphabetentum und Lektüre. Zur Sozialgeschichte des Lesens in Deutschland zwischen feudaler und industrieller Gesellschaft. Stuttgart 1973, S. 61. Vgl. auch Ammelkung 58!
- (8) Zit. nach Wild, Reiner. In: Ders, Die Vernunft der Väter. Zur Psychographie von Bürgerlichkeit und Aufklärung in Deutschland. Stuttgart 1987, S. XIIV.
- (9) Ebers, Hans-Heino (Hrsg.): Kinder und Jugendliteratur der Aufklärung. Eine Textsammlung. Stuttgart 1980 (Reclam Universal-Bibliothek 9992), S. 7.
- (10) Schummel, Johann Gottlieb: Kinderspiele und Gespräche. 3 Teile. Leipzig 1776-1778.
- (11) Rochw, Friederich Eberhard von: Der Kinderfreund. Frankfurt 1776.

- (12) Campe, Joachiam Heinrich: Robinson der jüngere, zur angenehmen und nützlichen Unterhaltung für Kinder. 2 Teile. Hamburg 1779/1780.
- (13) 拙稿:「児童文学の社会史に寄せて—ヨアヒム・ハインリヒ・カンペ『ロビンソン・ジュニア』の例から—」 関東学院大学文学部『紀要』第72号 1994年, 345—360頁および「ほらばなしはどのようにして啓蒙の時代を生き延びたか—ヨハン・ゴットリーブ・シュンメル『抵当遊び』から—」 関東学院大学文学部『紀要』第78号 1996年, 111—125頁。
- (14) Weiße: Selbstbiographie, S. 184f. Hier: Zit. nach Promies, Wolfgang: Kinderliteratur im späten 18. Jahrhundert. In: Grimminger, Rolf (Hrsg.): Deutsche Aufklärung bis zur Französischen Revolution 1680-1789. München 1980, S. 800.
- (15) Neuer Kinderfreund, Bd. 1, S. 4.
- (16) Schumbohm, Jürgen (Hrsg.): Kinderstuben. Wie Kinder zu Bauern, Bürgern, Aristokraten wurden. 1700-1850. München 1983.
- (17) 前産業社会的〈大家族制〉と市民社会的〈小家族制〉についての図式的把握に対しての疑義については、例えば、上掲書23頁参考のこと。
- (18) 梓筋の時間は四年を超え、刊行の実年に合わされている。登場人物の成長には、読者の成長が平行して進行することが望まれている。全巻を終えるに当たって編者は、登場人物と共有する時間を離れる読者に彼らのその後を伝える。グスタフはとくに学校に上がり、エドゥアルトは指物師の親方のもとで修行に勤しんでいる…という具合に。そして、子どもたちが家庭を出てそれぞれの道に踏み出した後日談は、『新児童の友の家族の往復書簡』に引き継がれる。Engelhardt, K. A.: Briefwechsel der Familie des neuen Kinderfreundes. Th. 1-6. Leipzig 1799-1802. これもヴァイセの先例『児童の友の家族の往復書簡』に従ったものである。Weise: Briefwechsel der Familie des Kinderfreundes. Th. 1-12. Leipzig 1784-92.
- (19) Neuer Kinderfreund, Bd. 12, S. 129.
- (20) ヨハン・ルートヴィヒ・フーバーの自伝から引用。収録は、イレーネ・ハルダッハ＝ピンケ／ゲルト・ハルダッハ編『ドイツ／子どもの社会史 1700-1900年の自伝による証言』(勁草書房) 1992, 206頁(田邊玲子訳)。
- (21) 上掲訳書, 204頁。
- (22) フランツ・クサヴァ・ブロンナーの自伝から引用。上掲訳書165頁(木村育代訳)。5歳くらいからは、修道尼の経営する学校で読本をもとに

一字ずつたどる程度の読み書きを習った。試みに『児童の友』に登場する子どものうち最年長シャルロッテの年齢11歳に当てはめると、この証言者がその年齢に達したのは1769年ということになり、この年にはボードマーの『古代人の思考法や風習を発見するための歴史物語』が、その前年にはイザーク・イーゼリンの『青少年の有用と楽しみのための捧げもの』が出版されている。ちなみに一世を画したヴァイセの『新ABC読本』の出版は1773年で、この証言者が5歳のときにはまだ出版されていない。

- (23) 上掲訳書, 159頁。
- (24) Weiße, Christian Felix: Neues A, B, C, Buch, nebst einigen kleinen Uebungen und Unterhaltungen für Kinder. Frankfurt und Leipzig 1773, S. 44. この読本および著者に関する証言に次のようなものがある。「私がほぼ六歳の頃には、当時一時代を画した、ヴァイセンのAbc読本を終えてしまっていた。ヴァイセンというのは、今は巷間にあふれる児童書の時代を築いた先駆者であり、今日にいたるまで児童書は彼の手本に倣っているし、またこれからそうだろう。わたしは彼のAbc読本の美しい色とりどりの絵をできるだけまねて描いて遊んでいたので、その結果、それまで通っていた学校ではもはや物足りなくなってしまった。」ヨハンナ・ショーペンハウアー（1776年生）の自伝からの引用。上掲訳書, 237頁（田邊玲子訳）。
- (25) Neuer Kinderfreund, Bd. 1, S. 22.
- (26) Ebd., Bd. 3, S. 85-134. 以下、『幽霊』からの引用は、幕と場のみ表記する。
- (27) Günther, Christoph Willhelm: Kindermährchen aus mündlichen Erzählungen gesammelt. Erfurt 1787. 参照した版は, Eicher, Thomas/Laubrock, Eva/Moersen, Tobias (Hrsg.): Kindermährchen aus mündlichen Erzählungen gesammelt. Oberhausen 1999, S. 11-17.
- (28) Ebd., S. 14.
- (29) Ebd., S. 11.
- (30) Ebd., S. 12.
- (31) Ebd., S. 13.
- (32) Ebd., S. 14.
- (33) Ebd., S. 14.